

日本大震災、広島のと砂災害、御嶽山噴火の生々しい記録。戦争体験者・被爆体験者は近い将来ゼロ人になることは必然だ。このような話群（①～⑤を含める）をどのように位置づけて考えていけばいいのだろうか。

最後に刺激的な一節を記しておきたいと思う。「3・11後、さまざまな分野で記録を残すことの重要性が強調されていると感じる。確かに必要な作業である。しかし、そうして生まれる膨大な記録も人びとの記憶に変換されないままでは、いざという時、期待される力を発揮しない。」（伊藤和史「記録と記憶／過去からのメッセージを生かす」『本郷』第112号／二〇一四年七月）。

わたしたちは従来の口承文芸の枠組みにとらわれることなく、災害（天災・人災）伝承、負の遺産の継承という課題・難題と向き合い関わっていく必要があるのではなからうか。そして、何ができるのかを時間をかけて考えていく必要があるのではなからうか。

* 本稿はシンポジウム当日の挨拶・趣旨説明です。その一部を割愛したり補足したりしてまとめました。

【参考文献】

みやぎ民話の会編「二〇一一・三・一一大地震 大津波を語り継ぐために―声なきものの声を聴き 形なきものの形を刻む―」『みやぎ民話の会叢書 第十三集』二〇一二年
日本民話の会編「東日本大震災を語り継ぐ」『聴く語る創る 第二十一号』二〇一三年（よねや・よいういち／國學院大学）

シンポジウム／「震災と口承文芸」

3・11後の記録者たち

―聞き語ることに即して―

小田嶋 利江

1 伝承の実在感と記録者たち

記録者と伝承者 二〇一一年三月十一日の、あの大地震大津波以降の被災地で、一人一人のお仕着せでない言葉を聞き取り、それをできるだけゆがめずに記録しようとした、いくつかの記録者の実践の姿を、本稿では考えてみたい。とりわけ、対面した聞き語りの座でやりとりされる会話の場に腰を据えて、被災地の一人一人のありのままの暮らしと話を、試行錯誤しながら記録しようとした試みに、ここでは目をこらしてみたい。

もしそうした場が、新しい言葉の伝承の芽のようなものを宿しているとしたら、その場の姿を見つめ記述し続けることで、これからの「話」の発生を垣間見る幸運に、あるいはめぐりあえるかもしれない。とはいえ、記録者たちは、一人の人の言葉をその人にとっての「あったること」として、できるだけ「ありのままに」記し伝えることにのみ、力を注いできた。

そして、日々揺れ動く被災地の状況と人々の内面においては、

その現場に関わるものはすべて記録者となり、同時に伝承者となりうる。昔話の語り手が、その身一つに話を聞きたくわえ、その身一つで話を語りあらわすように、彼ら彼女らは、歴史的現場に居合わせたがために、その身体を媒体とした記録者となり、おなじく伝承者となろうと意志した人々でもある。本稿が、従来の「言葉の伝承者」の範囲では囲いきれない彼らに、しかし目を向けようとする意味はそこにある。

そのためには、まず、伝承の種子が芽吹く生気ともいべきもの、伝承の実在感を考える手がかりを探してみたい。

伝承の実在感 ささまざまな言葉の伝承のすぐれた語り手によってふるまわれる「伝承話の語り」には、ゆるぎなく充実している内実の輝きが、たしかに感じられる。その理屈づけられない伝承の実在感とは、いったいなんだろうと、つねに考えていた。考える手がかりがあるとすれば、語り手という伝承者の内面に向き合うことしかないであろう。

南三陸町の語り手 山内郁翁 いまや数少なくなった宮城の伝承の語り手のお一人、本吉郡南三陸町入谷の山内郁翁（昭和四年生）とは、一九九三年以来、みやぎ民話の会の一員として、ずいぶん長いおつきあいをさせていただいている。郁さんを採訪させていただくのは、もちろんその身に聞きたくわえられた「昔話」「伝説」「世間話」を、その身をもって語りあらわしていただき、この耳で直に聞きたいがためである。ただ採訪は、とくに一人でお訪ねしたおりは、いわゆる輪郭のくつきりとした話らしい「話」

にはいたらず、それらの周辺の話、つまり雑多な暮らしの話、人生経験の話、いわばもつとも広い意味での世間話のやりとりで、多くの時間を過ごすことも少なくなかった。ただその時間は、わたしにとつては、この上なく楽しかった。

郁さんの生まれ育たれた入谷の里は、リアス式海岸の特性として、海に近いながら、山間の集落である。三陸海岸には山がせまった小さな入江が南北に連なり、その入江を漁港にして古くから浜の集落が営まれた。その一つである志津川の港から旧街道を西に向かい、切通しとなった最初の峠を越えるや、なかなか山間の小盆地が開ける。盆地の中にもゆるやかな起伏が連なり、手入れされた田畑に囲まれた家屋敷が散らばっている。伊達藩政時代の旧入谷村、現在の南三陸町入谷地区の眺めである。平泉時代から近世初期までは、金採掘のための山間の町場として賑わい、藩政時代は先進的養蚕技術をいち早く取り入れ、伊達藩の養蚕のさきがけとして繁栄した。

むかしかたり 郁さんは、多様な口頭伝承をその身にたくわえておられるが、その伝承全体を表しうる入谷の言葉は、「むかし語り」である。口承文芸研究における「昔話」という語彙は、「むかし語り」という伝承現場の語彙の柔軟で多様な意味の一端を担うにすぎない。郁さんの「むかし語り」とは、言葉によって伝えられるさまざまな中身と形の伝承と、それらを語り聞く伝承行為までも広く包みこむ包容力があり、入谷ではそのような言葉としていまも受け継がれている。

津波の伝承 郁さんは、入谷地区各所の地名由来として、いくつもの小さな津波の痕跡を伝承されている。津波がゆりあげたから「ゆりあげ沢」「よらさ」、その先の峠は越えなかつたから「越えず峠」、その峠の奥にみな逃げ込んで助かつたので「のこり谷」など、小さな話が入谷の沢にちりばめられている。郁さんは、「津波の足跡だおね、地名に残って伝わった」と言う。そしてしばしば、「ほんだから、どんなちっちゃい地名だつても、かならずなにかにか、意味だの由来だの持つてんで。なんでもないことで名あ付けたとこ、一つもねえんだおね」と、しめくくられる。ともかく郁さんにとっては、いまや地元の人々も記憶していないどんな小さな開地であっても、なにがしかの意味や物語をひそめて、郁さんの身のうちの伝承地図上に、植えこまれている伝承の一つなのであった。『山内郁翁のむかしかたり』（二〇〇九 みやぎ民話の会 七〇―七二頁参照。）」

郁さんは、祖父永之進翁から、昭和三陸大津波のおりの体験談をも聞き伝えている。

じんつあまの津波の思い出

じんつあまは、夜間も寢床で語つたつたなあ。小さい頃、ほのじんつあまと、おれ、いっしょに寝たからね。学校さ入る前（へえめえ）な。学校さ入るん（へえ）なつて、一人で寝しえられん（おら）の。職人の仕事なら、なんでもやつたんだ、俺家のじんつあま。大工に左官に桶屋に籠屋…なんでもやつた。屋根も葺いたし、法螺も吹いたし。「八細工（はっさいく）の七貧乏（しちびんぼう）」なんて、悪口

語らいて。だから話もね、多種多様でね、知らねえもののお、なかつたんだね。言い伝えとか、云われみたいのも語つたし。おもに体験談ね、「おらは、ああやつた、こうやつた」つて。いつつつことないんだ。俺家（おら）では、しよつちゅう、そんな話語つて。そして、だんだん年取つてくと、「おらあ、若え時（わ）」つてなんだお。「こうゆうことあつた、ああゆうことあつた」つてね、自慢話語つから。

昭和八年の津波ん時、三月三日の節句だつたんだつて。じんつあま、ちようど若者の時だから、町（現南三陸町志津川の市街）まで後片付けなんかさ行つてね。町に親類だの従兄弟居つから、見舞いにいったんだけつども。ほら、たいへんな騒ぎだからね、あとお手伝い（てつた）をして、片付け方なんかやつてね、二日三日家（うち）さこなかつたんだ、一段落つぐまでね。死んだ人お探したり、集めたり。砂かぶつてつからねえ、探して、埋まつてたのを見つけて、掘りだして。そして親類の人だからね、やつぱ、トグワとかスコップで掘るわけにいかねくて、みな手で掘つたんだつて。その当時、みな節句に餅搗いたから、「その餅食つて、口ん中に入つたまま死んだ人が居だつたあ」なんて、よく語つたんだよお。『二〇〇六年七月七日 本吉郡南三陸町入谷の山内郁翁（昭和四年生）から採録整理』

郁さんの話は、それが「昔話」「伝説」「世間話」であろうと、そこかられ落ちるようないかなる「はなし」であろうと、記

憶の中の伝承の内実は、かつての聞き語りの場や祖父・母などの語り手その人の姿とともに、また話にまつわる土地の風景風物のたたずまいと結びついて宿っている。

□承文芸のうちでも「昔話」は、特定の時間と場所に限定されないことに、その表現様式の特徴があると言われる。話としての「昔話」を採りだせば、郁さんの「昔話」もその例外ではない。ただ、郁さんという伝承者の内面においては、語りの場としての綿掛けする母の記憶に根付くことで、その伝承としての生気と実感を汲みあげ続けていたように思える。郁さんの記憶のうちにある「むかし語り」の伝承の実態は、その語り手や語りの場であった家の生業や暮らしに寄り添い、人生の体験や土地の風物の記憶と織りあわされることにより位置を占めていると言えよう。「『山内郁翁のむかしかたり』(二〇〇九 みやぎ民話の会) 三二五―三二九頁」

2 「あつたること」を「ありのままに」伝えようとするさまざまな試み

つねに湧き出しては消えていく聞き語りの座でやりとりされる言葉のうち、その中のごくわずかなものが、聞き手語り手の身体にたしかな伝承として根をおろすことは、思えばしごく稀有な幸運にも感じられる。そしてその幸運への可能性は、伝承者自身の個人的な身体感覚を伴ったさまざまな記憶とともに織りあわされることで、かろうじて開かれるのではないか。

一方で、津波被災地の実態は、「土地柄」「地域性」という名の、これまで無意識の認識枠であった一般性・類型性が攪乱され、消失されたように見え、津波以前のその存在の前提から、まず確かめねばならないようにも感じられる。

こうした感覚を手がかりに試行錯誤しつつ、わたし自身は南三陸町を中心に、土地の人々の暮らしの聞き書きを始めた。攪乱され消失されたように見える「土地」に根づく伝承とは、土地に生きる人々一人一人の、個別の記憶に向き合い、それを聞き語る場を土壤としてこそ、芽吹くのではないかという、漠然とした感覚があつたからである。

その正否は置くとして、以下に紹介する被災地の記録の実践は、そうしたどこか心もとない、しかしどこか近しい感覚の糸でつながっているように思える記録者たちの試みである。

A 東松島図書館による震災体験談の聞き取り

「震災の記録」事業 宮城県東松島市矢本の中心部に位置する東松島図書館は、三月十一日の地震による施設の被害は大きかったが、津波浸水はかろうじて免れた。図書館職員は役場職員として避難所で緊急対応に追われるが、かたわら被災地域外に向けて、ウェブページから市内読書施設の被災状況を発信した。それに応えた全国からの返信の中に、阪神淡路大震災の被災地、神戸からのものもあつた。三月二十九日、神戸市教育委員会の坂本和子氏より「震災の一次資料」という表題の投稿があり、

そこには、いちばん散逸してしまいがちな一次資料、「避難所での張り紙、自治体の広報、会議の資料、時間の止まった時計」などをできるだけ収集しておく必要性が述べられていた。

三月十七日に図書館周辺の電気が復旧し、緊急対応も一段落すると、正規・臨時の図書館員は、落下図書配架、被災地外への支援図書の要請、届いた支援図書の配本、移動図書館での巡回などの被災者への読書環境整備の事業に取り組んでいった。そのなかで、避難所、仮設住宅、学校・病院などの公共施設などを、配本や移動図書館で廻るあいまに、各所で目にする貼り紙、チラシ、パンフレット、支援者の配布物・発行物などを、「震災の一次資料」として紙の資料を中心に収集する。

二〇一二（平成二十四）年度、震災の記録の収集・保存を企画し、市の予算と外部助成団体の補助金を申請し、支援団体の助言をもらい、試験的に事業を立ち上げた。認可された補助金により、それまでの紙資料収集に加えて、個人の震災体験談の聞き取り、写真・動画の収集など、収集する一次資料の範囲を拡げていった。その年のうちに、一部の資料は整備されて一般公開がはじまった。『地域活性化志向の公共図書館における経営に関する調査研究』二〇一四 国立国会図書館 二七三・九〇頁

従来の業務においては、文字の資料、それも図書や雑誌・新聞などの定形化・安定化した資料を管理活用することにもつばら携わっている図書館員が、稀有な歴史的現場に居合わせたことで、「震災の一次資料の収集・保存・整理」という課題に取り

組んだ。そこからすぐれた共有財産が残されつつあるが、その道筋を導いたのは、図書館員としての資料全般に対する冷静堅実な見識を基礎に、現場の状況を見極め通例にとらわれず新しい課題を発見して積極的に試みていったそのしなやかさと粘り強さにあったように思う。図書館員は、文字という外部化された言葉を越えて、その源、被災者一人一人の記憶の中にまで「一次資料」の意味を越境させていたのである。担当者は事業報告において、「この事業の意義は、記録しなければ残らない市民の「心」にある「資料」を有形の資料（映像・文字）に変換することにあり」と述べている。〔同上 九二頁〕

震災体験談の聞き取り 震災体験聞き取りの指針は、その初期の企画段階から、とても配慮の深いものであった。語り手に「思うままに」語ってもらい「フリートーク」を原則に、それでは語りにくい方のために、いくつかのテーマをあげて選んでもらい、また話すことが苦手な方には、「聴き手」がそのつど問いを投げかけ、聞き語りのやりとりのある場を作ることが意識されていた。むしろ、非公開にしてほしい部分の指定も、語り手の自由意思にゆだねられており、記録方法も、録音・撮影・両方など、自由に選択できる。〔同上 八三頁〕

図書館内で公開されている撮影映像を視聴すると、定形化した質疑応答とは対極にある、まさに特定のテーマをめぐって、語り手は語りたいことを語りたように語ることができる、聞き語りの座が生まれているように見えた。ときには、聞き手自身も被災

者として、自らの体験を語ることになる。まさに聞き手と語り手が交互に入れ替わりうる、のびやかな場が作られていた。

聞取りの担当者は、この場へのぞみ語った人々の、そのおりの内面の変化をもととっている。「気持ちの整理のきつかけになる」「楽になる」「はじめの一步のきつかけになる」など、多くの「内面の効果」が挙げられているが、みずからの記憶と向き合い、言葉として発することで、次の一步を踏み出す心の足掛かりを得たとも言えるであろうか。ここで興味深いのが、そうした聞き語りの場合は、生身の聞き手のみでなく、録音機・カメラも含めて、それら記録者が聞き手として語り手の真正面から向き合うことにより、生み出されたと意識されている事である。「同上 八四―八五頁」

B ボランティアグループ「RQ聞き書きプロジェクト」による被災地の人々の人生史の聞取り

聞き書きプロジェクトの経緯 震災直後の二〇一一年三月十三日、エコツーリズムの実践者・研究者が中心となり、被災者救援のために、RQ（レスキュー）市民災害救援センターが発足し、野外活動の経験を活かして仙台以北から南三陸にかけて、主に小さな集落へのきめ細かい支援活動を開始した。

最初の数か月間、現地に入ったスタッフたちは、地域集落での「よそ者」として、いかにすれば地域の人々にとって真に役立つ支援を行えるのかに悩み、真剣に考えた末、一つの答えに行きつく。それはただ、いつでもどこでも、そしてなんであれ、

一人一人の「お話をとことん聴く」ということだった。ただ真摯に向き合い、相手の言葉の奥の気持ちの裏にまで思いをいたし、自発的に身を傾けて聴き続けたとき、はじめて地域の人々の垣根が払われ、一人一人が真に求めているところが見えた。そして互いに気兼ねなく深く付きあえる間柄となり、支援者たちは現地の人々の語り口の味わい深さ、生き生きとした表情に魅かれ、地域の歴史・習俗や一人一人の人生に深い興味を抱き、聴くことで支援活動はむしろ支援者の学びの場となった。

二〇一一年七月には、総本部長の広瀬敏通は、被災者の話を聞いてそれを残していくことを提案する。その目的は、被災体験を聴くのではなく、津波で形あるものは流されてしまったかもしれないが、人々の記憶と心の中にある宝物を、今聴いて書き遺し、次の世代につたえよう、というものだった。そしてこの地域の素晴らしさを外に向けて発信することが、将来的に復興の力にもなると考えた。しかしその活動は、当初ボランティア仲間からも理解されず、時間に追われマニュアルに頼った聞き取りは、語り手の語りたいたいことを聞き取れず、不興を買ったり、打ち解けられずに、内容が薄いままで終わり活動は停滞する。

十月には、聞き書きをしたいというメンバーを募ってプロジェクトの根本的立て直しはかられた。聞き書きについての研修を行い、問題の洗い出し、解決方法を検討し、意見やアイデアを出し合って、今までの課題を一気に見直した。それを受けて十一月十二日に、まったく新たな聞き書き活動を再開した。

それは、マニユアルにとらわれず、「とことん聴く」という実践だった。一人一人の人生の物語は魅力的で素晴らしく、参加者は毎回去りがたい思いで現地を後にした。

十一月末、RQ市民災害救援センターは当初の役割を終えて活動を休止するが、「聞き書きプロジェクト」は独立して活動を継続する。メンバーが現地を訪問して話を聴き、それを逐語録に起こして「自分史」として本にまとめ、話者に届けている。そのうち、話者の了解を得たものは、ネット上に公開している。「聞き書きプロジェクト・MEMOKKO: (<http://kikigaki-jp-memokko.blogspot.jp/>)」

一人一人の人生と地域の発見 支援者として小さな集落に飛び込んだ彼らは、地域の人々と、まず被災地の被支援者という類型の枠で対してしまったのだろう。それが、自分を聞き手として置き直し、一人一人に向き合うことで、語り手一人一人をそのつど発見していき、そこから垣間見える地域を発見していった。これは、支援者から聞き手への越境であり、震災をまたいだ一人の人生史の聞き書きは、そのすぐ先にあった。その視野の広がりには、「この地域にもともとあって、震災によって顕在化した、過疎高齢化、産業の斜陽化などの問題」にまで達している。

C 東北学院大学博物館と学生による文化財レスキューと牡鹿半島のくらし展

資料の文化財レスキューから思い出の聞き書きへ 牡鹿半島に

所在した石巻市鮎川収蔵庫の考古・民俗資料が、三月十一日の地震と津波により被災した。東北学院大学は、大学博物館を拠点としてこれらコレクションを受け入れた。被災資料はクリーニングのち、殺虫・脱塩などの保全作業が、学生たちを中心として進められ、現在も継続されている。

二〇一二年からは、現地鮎川と仙台で、救い出された民俗資料を展示し、学生たちが地域の人々から、個々の資料にまつわるさまざまな基本情報を聞き取った。やがて、聞き取りはモノにまつわる一人一人の暮らしの思い出話へと展開し、モノの使用法、だけではなく、その背景にある人々の暮らしが垣間見えてきた。

二〇一三年も鮎川、仙台、あらたに石巻での資料展示会と来場者からの聞き取りを継続し、鮎川の老人ホーム、デイサービス、捕鯨会社などへ資料を持ち込んで聞き書きを行った。現在は、そのつど作成してきた六〇〇枚に達する「聞き書きシート」をもとに、民具にまつわる一人一人のエピソードの聞き書きを文章としてまとめ、それらと資料台帳とを結ぶデータベースの構築を模索している。「一人ひとりのくらしの風景がみえてくる―牡鹿半島のくらし展―」（二〇一四 東北学院大学博物館）一人一人の暮らしの風景「聞き書きシート」には、被災文化財というモノを手がかりに、語った人がどのような思い出を、どのような感情で語り、さらにどの話題につながったかなどを細かに記録している。このシートからは、聞き手と語り手の間にどのような場が開かれ、そして変化し、どのような気持ちのやり

とりがなされたかが読み取れるだろう。聞き取りに挑戦した学生たちは、従来、不特定で一般化した説明を付されたモノが、個人一人一人の暮らしの思い出の種子となったのを目の当たりにした。資料情報の提供者から越境して一人の語り手となった人々に相対した彼らは、聞き語る場の聞き手となっていき、言葉をやりととりする楽しさを発見した。〔同上 一四頁〕

D 小森はるか・瀬尾夏美による被災地の人々の日常の記録

実感の持てる現実と日常の記録 首都圏の大学生であった小森はるかと瀬尾なつみは、二〇一一年三月末から東北沿岸にボランティアとして通い始めた。彼女らは何度も同じ場所を訪れ、テキスト、写真、スケッチ、映像などの記録を続けてきた。そうした映像記録『あいだのことば』には、次のような言葉が添えてある。

「そこで出会った人たちは、私たちをすんなりと日常という時間の中で受け入れてくれました。その時に話されていた会話こそ、この大きな出来事の中で何よりも実感の持てる現実であったような気がします。通う度にその現実は少しずつ、またはがらりと姿を変えていました。その間に起きてしまっている何かを考えるためには、町の景色も、人々の表情も、言葉も、できるだけ見たままに留めておくこと、そしてどうにか形を歪めることなく誰かに伝えようとすることが必要だったのだと思います。」「せんだいメディアテーク 三がつ十一にちをわすれないためにセンター公開のDVD『あいだのことば』の解説」

ボランティア活動をしていた彼女らが、映像を撮り始める契機となったのは、一人の被災者に津波で流失した自宅の跡地を撮影してきてほしいと頼まれたことだという。たった一人に見せるために被災地を撮影したことで、彼女らの記録者としての姿勢が定められたのではないだろうか。彼女らにとって、聞き語りの座の会話こそ「実感の持てる現実」であり、たとえ被災前の生活に戻らずとも、それこそが生きていくための「日常」と感じられたのであろう。芸大生である彼女らは、みずからを、表現者であるとともに、すべてを「見たままに留め」そして「どうにか形を歪めることなく誰かに伝えようとする」記録者であり、伝承者であろうと意志しているようである。

E リアスアーク美術館による常設展示『東日本大震災の記録と津波の災害史』

二〇一三年四月三日公開されたリアスアーク美術館の常設展示『東日本大震災の記録と津波の災害史』は、きわめて意義深い展示であるように思われる。展示室には、多くの記録写真、関係資料などとともに、一般に「瓦礫」と呼びならわされたおびただしい被災物が、並べられている。そしてその被災物の傍らには、そのモノをめぐるとつばやきのような言葉が書きつけられている。それについて展示担当者は、以下のように解説している。

「被災物について」被災現場では足元を埋め尽くす様々な日

用品が、私たちに何かを語りかけてくるように感じました。その言葉をつむぎ、物語として表現し、それぞれの被災物に添えている。「中略」一見すると被災者の肉声を「聞き書き」したような文章は、被災後にさまざまな被災者と語り合う中で得られた物語をベースとして筆者が創作したものである。このような文を資料展示に添えるという発想は、博物館学的、展示学的に考えて異例のことだと自覚している。しかしこのタブーをあえて犯した。／特定できない個人を想定し、その個人が「被災物」に宿る記憶を語っているという演出は、被災物を普遍的存在にすることが目的である。不特定の個人をイメージするためには、自分に身近な誰か、あるいは自分自身を仮想せざるを得ない。それによって当事者性が無意識に生み出されるという効果を狙った手法である。『東日本大震災の記録と津波の災害史』(二〇一四 リアスアーク美術館) 一五〇―一五一頁

これは、被災物に宿る一人一人の記憶と会話することで、展示者の身を通して紡ぎだされた言葉と言えようか。それは、個人の記憶としての身体の実在感を保ちつつ、匿名性を介することで、あなたやわたし一人一人の生身の記憶として、その場で想起されることを予期している。

展示者はまた、「我われが伝えようとする被災物の意味とは、「記憶再生装置」としての文化的意味である。被災物に宿る「暮らしの記憶」を再生することこそが被災物収集保存の目的なのである」(同上 一五一頁)

彼もまた、一人一人の記憶に向き合った会話の場で、その記憶の実在感を一人の身を通して伝える試みに、伝承の芽への可能性を託しているように感じられる。

3 伝承が芽吹くところにとどまらず

これらの記録の試みは、互いになんらの連絡も連携もほとんどなく、立場も目的もさまざまでありつつ、被災地での「聞き取り」「聞き書き」という試みにゆきついている。それらを見渡してみると、同じ軌跡をたどる細い現場の感覚が、それらをつないでいるように感じられる。

そして、みやぎ民話の会の仲間である早坂泰子も、津波で流し姿を消した港町、そして子ども時代を過ごしたふるさと閑上(宮城県名取市)の懐かしい暮らしの風景を、言葉によって形にして残し、これからの復興を担う閑上の人々に届けたいと願い、会の仲間とともに十人の語り手を聞き手として訪ねて聞き書きし、一冊の記録集にまとめている。「早坂泰子・河井隆博・小野和子共編「閑上」津波で消えた町のむかしの暮らし」(二〇一四)じつはほんらい、民話、口頭伝承の採訪とは、聞き語る座の中で、語り手一人一人の記憶に聞き手として向き合い、身をもって聞き取っていくことに他ならないなら、なにより初心にとどまることを心に銘記するしかないであろう。

(おだじま・としえ／みやぎ民話の会)